

alveolar の構造が緻密にみえるだけで根本的な違いはみられない。

鞘翅類幼虫の腸及び体腔に寄生する多室性簇虫について 小幡謹一郎 (出石高)

Stictospora coelocystis n. sp. (仮称) は trophozoite 及び sporont はコガネ虫科の幼虫の腸管に、その胞嚢は体腔にのみ発見される。体腔性の多室性簇虫は之が本邦で初めてである。外国で昆虫寄生のものが二・三種発見されているがその生活史は不明である。本種は sporozoite から sporont となり二虫が associate する迄は中腸で發育し、細胞外成長を行う。胞嚢並に孢子形成は体腔内で行われる。胞嚢は宿主後部四体節位の糞管に集るが、胞嚢や孢子が普通のもののように糞中に発見出来ない。従つてその体外への脱出並に感染は宿主の脱皮又は死亡腐敗によつて行われるものと考えられる。体内感染はしない様である。

gametogony 並に sporogony は他の簇虫と余り交つた呈は見られないが、macrogamete はギボシ型・ $7 \times 5 \mu$, microgamete は円筒型に近く、 $3 \times 1.3 \mu$, spore は両円錐形、僅に曲つて居り、 $9 \sim 10 \mu \times 6 \sim 7 \mu$ 。本種は胞嚢が体腔中に発見される事と、先房の斐数が 20 本前後もある点で同属の既知 3 種と明瞭に区別する。

問 細胞内生活期は全然みられなかつたか。(阿部徹) 答 sporozoite はその先端のみを宿主細胞につつこんで成長し細胞内に陥入するものはみられない。

邦産 *Ophryocystis* 属の簇虫について 星出兵馬 (山口大・教育・生)

裂殖簇虫類 *Ophryocystis* 属の簇虫は A. Schneider によりて発見報告されて以来 9 種を記録されているが、本邦からは尙報告されていない。演者は 1950 年から鞘翅類の諸種を検してその Tenebrionidae 科, Cistelidae 科及び Nitidulidae 科の 6 種が寄生されていることを知つた。その中 Tenebrionidae 科につく次の 3 種につき生活史等の種的標徴を報告する。

1. *Ophryocystis ozakii* n. sp. 宿主. キマワリ (*Plesiophthalmus nigrocyaneus* Motsch).
2. *O. nisikiensis* n. sp. 宿主. ニジゴミムシダマシ (*Artactes lunuliger* Marseul).
3. *O. yamagutiensis* n. sp. 宿主. エグリゴミムシダマシ (*Uloma latimanus* Kolbe).

尙以上簇虫類の新種名は仮称とする。

宮入貝から見出された *Conchophthirus* (纖毛虫) の一新種について 尾崎佳正 (広島大・理・動)

Conchophthirus katayamae n. sp. 本種は宮入貝 (片山貝) *Katayama nosophora* の外套腔に寄生する。体は円盤状で稍々前後に長く、前後径約 72μ 左右径約 60μ 。後端から約 $1/6$ の所に右側縁に口の陥入がある。cytopharynx は深さ約 14μ 。体表には一定の排列をした纖毛列があつて同長の纖毛が生じている。大核は体の前端に近く偏在して三角形をなす。小核は大核の表面に附着して存在する。大核は 1 個にして $25 \times 11 \mu$ 。endoplasm は大核の前方では稠密であるが後方には大なる食泡を多数持っている。食泡の中には宿主の血球が見られる本種は巻貝に寄生する点、口が後端に近くあることは *myxophyllum* に似ているが、外套腔に寄生し大核が 1 個である点よりして *Conchophthirus* 属にむしろ近い。在来の種からは口の位置、大核の位置 cytopharynx の構造等で区別される。

問 (1) 食物塊が口の構造に比べて大き過ぎるものがあるか。その様な場合摂食時の口の働きはどうか。(2) ウニ寄生のものでは縫合線部が開いて無纖毛の裸域が現われる場合があるが、この種の生体観察ではどうか。(阿部徹) 答 (1) 口の大きさに比べて食塊が大きい場合、cytopharynx の伸縮も考えられるが、又 suctoria の吸管で *Paramecium* が攝取される場合のように食塊の方が変形される事も想像される。但し実際の摂食状態の観察はまだ行っていない。(2) 縫合線が 2 本からできている際その間隙に変化がある所から、開くこともあると思われる。